

平成12(2000)年度

鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

天神山遺跡
横枕所在遺跡2・3
横枕古墳群
本高段木遺跡
長谷所在遺跡1
倭文所在遺跡1・2
下味野所在遺跡1
下味野古墳群

2001

鳥取市教育委員会

序 文

鳥取市は海・山・大砂丘など豊かな自然環境に恵まれた山陰東部の中核都市として発展してまいりました。現在市内には数多くの遺跡が知られていますが、全国的な近年の各種開発事業の増加とともにその取り扱いが重要課題となっております。もともと埋蔵文化財は、先人の生活を知る上で欠くべからざるものと言られてまいりましたが、特に環日本海交流が叫ばれる今日、先人たちの知恵・交流を窺い知ることは、これから的生活・交流等にかならずや役立つ市民の貴重な財産となりましょう。このような認識のもと鳥取市教育委員会では開発と文化財の共存を図るべく各関係機関の指導を得るとともに市民の皆様の深いご理解をいただきながら埋蔵文化財調査事業を進めております。

さてここに報告いたします天神山遺跡、横枕所在遺跡2・3、横枕古墳群、本高段木遺跡、長谷所在遺跡1、倭文所在遺跡1・2、下味野所在遺跡1、下味野古墳群の発掘調査事業も地権者の方々をはじめとする関係各位のご協力によって無事初期の目的を果たし、大きな成果を得て報告書刊行のはこびとなりました。

ささやかな冊子ではありますが、市民の皆様ならびに関係の皆様のご利用に供していただければ幸いです。

平成13年3月

鳥 取 市 教 育 委 員 会
教 育 長 米 澤 秀 介

例　　言

1. 本書は、平成12年度に国・県の補助金を得て鳥取市教育委員会が実施した埋蔵文化財調査の記録である。
2. 調査を実施した遺跡は天神山遺跡、横枕所在遺跡2(仮称)・3(仮称)、横枕古墳群、本高段木遺跡、長谷所在遺跡1、倭文所在遺跡1(仮称)・2、下味野所在遺跡1(仮称)、下味野古墳群である。なお、本高段木遺跡については、鳥取県の遺跡分布図では服部所在遺跡2(仮称)となっているが、地番が本高ではかの服部の遺跡との直接的な関連も見受けられないのでこの名称に変更した。またこれらの遺跡のうち名称に(仮称)とつくものがあるが、便宜上本報告書では省略した。
3. 本書に用いた方位は第1図、第2図、第7図、第11図、第14図、第16図、第20図、を除き磁北を示す。また、レベル(H)は基本的に海拔標高であるがいくつかのトレンチについては任意のレベルを用いている。
4. 発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は鳥取市教育委員会に保管されている。
5. 現地調査から本書の作成にあたっては、多くの方々から指導・助言ならびに協力をいただいた。厚く感謝いたします。
6. 発掘調査の体制は以下のとおりである。

発掘調査主体

鳥取市教育委員会

事　務　局

鳥取市教育委員会文化課

調査担当者

前田 均・山田真宏・谷口恭子・藤本隆之・平川 誠

本文目次

序文 例言 目次

Iはじめに	1
1. 発掘調査の契機と調査の目的	1
2. 発掘調査の経過	1
II天神山遺跡	3
1. 遺跡の位置と環境	3
2. 発掘調査の概要	3
3. 小結	9
III横枕所在遺跡2・3、横枕古墳群	9
1. 遺跡の位置と環境	9
2. 発掘調査の概要	9
1) 横枕所在遺跡2	10
2) 横枕所在遺跡3	10
3) 横枕古墳群	10
3. 小結	10
IV本高段木遺跡	12
1. 遺跡の位置と環境	12
2. 発掘調査の概要	12
3. 小結	13
V長谷所在遺跡1	13
1. 遺跡の位置と環境	13
2. 発掘調査の概要	14
3. 小結	14
VI倭文所在遺跡1・2	15
1. 遺跡の位置と環境	15
2. 発掘調査の概要	15
1) 倭文所在遺跡1	15
2) 倭文所在遺跡2	17
3. 小結	17
VII下味野所在遺跡1、下味野古墳群	17
1. 遺跡の位置と環境	17
2. 発掘調査の概要	17
1) 下味野所在遺跡1	17
2) 下味野古墳群	17
3. 小結	18
試掘調査トレンチ一覧表	20
写真図版(1~13)	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図 調査地周辺遺跡分布図	2	第11図 本高段木遺跡 調査トレンチ配置図	12
第2図 天神山遺跡 調査トレンチ配置図	4	第12図 本高段木遺跡 第1トレンチ実測図	13
第3図 天神山遺跡 第1・第2・第3・第4トレンチ断面 実測図および第4トレンチ出土遺物実測図	5	第13図 本高段木遺跡 第1トレンチ出土遺物実測図	13
第4図 天神山遺跡 第5・第6・第7トレンチ実測図	6	第14図 長谷所在遺跡1 調査トレンチ配置図	14
第5図 天神山遺跡 出土遺物実測図 (2表採; 1・3・4は第7トレンチ)	7	第15図 長谷所在遺跡1 第1トレンチ断面実測図	14
第6図 天神山遺跡 第8・第9トレンチ実測図	8	第16図 傾文所在遺跡1・2 調査トレンチ配置図	15
第7図 横枕所在遺跡2・3・横枕古墳群 調査トレンチ配置図	9	第17図 傾文所在遺跡1 第1・第2トレンチ実測図	16
第8図 横枕所在遺跡2 第1・第2トレンチ断面実測図	11	第18図 傾文所在遺跡1(上)、下味野古墳群2(下) 出土遺物実測図	16
第9図 横枕所在遺跡3 第1・第2・第3トレンチ 実測図および第3トレンチ出土遺物実測図	11	第19図 傾文所在遺跡2 第1トレンチ実測図	16
第10図 横枕古墳群 第1トレンチ実測図	11	第20図 下味野所在遺跡1、下味野古墳群 調査トレンチ配置図	18

図 版 目 次

図版1	1. 天神山遺跡 調査地近景(南東から) 2. 天神山遺跡 第1トレンチ(南から) 3. 天神山遺跡 第2トレンチ(北西から)	図版8	1. 横枕古墳群 第1トレンチ(北西から) 2. 本高段木遺跡 調査地遠景(北から) 3. 本高段木遺跡 第1トレンチ出土遺物
図版2	1. 天神山遺跡 第3トレンチ断面(西から) 2. 天神山遺跡 第4トレンチ断面(東から) 3. 天神山遺跡 第5トレンチ断面(北から)	図版9	2. 長谷所在遺跡1 調査地遠景(東から)
図版3	1. 天神山遺跡 第6トレンチ(西から) 2. 天神山遺跡 第7トレンチ断面(北から) 3. 天神山遺跡 第8トレンチ(北東から)	図版10	3. 傾文所在遺跡1 第1トレンチ(西から) 4. 傾文所在遺跡1 調査地遠景(北から) 5. 傾文所在遺跡1 第1トレンチ(北西から)
図版4	1. 天神山遺跡 第9トレンチ断面(東北東から) 2. 天神山遺跡 調査区内出土遺物	図版11	6. 傾文所在遺跡1 第2トレンチ(西南西から) 7. 傾文所在遺跡1 第1トレンチ出土遺物 8. 傾文所在遺跡2 調査地遠景(南東から)
図版5	1. 横枕所在遺跡2 調査地遠景(南東から) 2. 横枕所在遺跡2 第1トレンチ断面(南から) 3. 横枕所在遺跡2 第2トレンチ(北東から)	図版12	9. 傾文所在遺跡2 第1トレンチ(西南西から) 10. 傾文所在遺跡2 第1トレンチ出土遺物 11. 下味野所在遺跡1・下味野古墳群 調査地遠景(東から) 12. 下味野所在遺跡1 第1トレンチ(南東から)
図版6	1. 横枕所在遺跡3 調査地遠景(南から) 2. 横枕所在遺跡3 第1トレンチ(南から) 3. 横枕所在遺跡3 第2トレンチ断面(西南西から)	図版13	13. 下味野古墳群 第1トレンチ断面(北西から) 14. 下味野古墳群 第2トレンチ断面(北から) 15. 下味野古墳群 第3トレンチ断面(北西から)
図版7	1. 横枕所在遺跡3 第3トレンチ断面(南東から) 2. 横枕所在遺跡3 第3トレンチ出土遺物 3. 横枕古墳群 調査地遠景(南から)		

I はじめに

1. 発掘調査の契機と調査の目的

鳥取市は、鳥取県東部に位置する山陰の中核都市の一つで、行政区域面積は237.20km²、人口は平成13年1月現在で15万人を数え、県庁所在地として政治・経済・文化の中心的な役割を担っている。市の北側には広大な鳥取大砂丘と朝鮮半島・中国大陸へつながる日本海が広がり、中央部には中国山地から流れ出た千代川が南から北へと貫流している。市域の中心はこの千代川の沖積作用によって形成された鳥取平野が占めており、北側を除いたこの平野の周縁部は丘陵地となっている。近年まで平野部は主に水田等の耕作地として利用されるとともに、丘陵地は梨を中心とする果樹栽培地として本市内外へ農産物を供給してきた。しかしながら昨今では企業進出や農業の後継者不足等によってしだいに産業構造が変容するとともに土地利用も大きく変容している。

このような鳥取平野は、原始・古代から周辺地域の重要な生産基盤として人々の生活を支えるとともに交通の要所としても重要な位置を占め、政治・経済・文化の中心として現在に至っている。こうして今日恵まれた各種の条件を背景として鳥取市内には数多くの遺跡が残されてきている。遺跡の種類は各時代・各種にわたり、これまでの遺跡分布調査によって2,300ヶ所を超える古墳・遺物散布地等が確認されるとともに現在もその増加の一途をたどっている。このため各種開発事業等との調整が必要となる遺跡も近年急激に増加してきている。

今回報告する天神山遺跡、横枕所在遺跡2・3、横枕古墳群、本高段木遺跡、長谷所在遺跡1、倭文所在遺跡1・2、下味野所在遺跡1、下味野古墳群も、天神山遺跡が住宅地、その他が道路整備の開発事業として計画され、事前に協議を受けたものである。対象遺跡のうちいくつかはこれまであまり調査が実施されておらず、開発との円滑な調整に必要な具体的な資料に乏しく、今回それぞれの遺跡の範囲、造構・遺物の有無と埋蔵状況、遺跡の性格等の資料を得ることを目的として発掘調査を実施した。

2. 発掘調査の経過

発掘調査は、各調査区ともトレントンによる造構および遺物の包含状況の確認に主眼をおいて諸準備の整ったものから順次着手した。

横枕所在遺跡2は、平成12年5月22日～29日に谷部に2ヶ所のトレントンを設定して調査を行った。調査面積は20.5m²である。

天神山遺跡は、平成12年6月5日～27日に鳥取農業高等学校前の実習田・畑地に計9ヶ所のトレントンを設定して調査を行った。調査面積は289.8m²である。

横枕所在遺跡3は、平成12年8月7日～9日に玉屋神社裏手の山林尾根上の傾斜変換点等に3ヶ所のトレントンを設定して調査を行った。調査面積は16.3m²である。

横枕古墳群は、横枕所在遺跡3と並行して平成12年8月7日～8日に低丘陵斜面の傾斜変換点に1ヶ所のトレントンを設定して調査を行った。調査面積は4.0m²である。

本高段木遺跡は、平成12年8月7日～9日に低丘陵崩前の平野部に1ヶ所のトレントンを設定して調査を行った。調査面積は22.3m²である。

長谷所在遺跡1は、平成12年8月21日に長谷集落の北東側の平野部に1ヶ所のトレントンを設定して調査を行った。調査面積は18.4m²である。

倭文所在遺跡1は、長谷所在遺跡1と並行して平成12年8月21日～22日に丘陵崩と丘陵崩前平野部に計2ヶ所のトレントンを設定して調査を行った。調査面積は41.6m²である。

倭文所在遺跡2は、倭文所在遺跡1と並行して平成12年8月22日に倭文神社付近の山林尾根先端部に1ヶ所のトレントンを設定して調査を行った。調査面積は14.4m²である。

下味野所在遺跡1は、平成12年9月27日に丘陵斜面の傾斜変換点に1ヶ所のトレントンを設定して調査



第1図 調査地周辺遺跡分布図

を行った。調査面積は4.2m²である。

下味野古墳群は、下味野所在遺跡1と並行して平成12年9月27日～28日に山林尾根上の傾斜変換点等に3ヶ所のトレンチを設定して調査を行った。調査面積は15.5m²である。

以上10遺跡の調査面積の総合計は447.0m²となる。なおトレンチはオープン掘削のため、安全性を考慮して段掘りにするなどの配慮をした。このため断面図は同一方向の壁面を合成したものもある。整理作業・報告書作成については現地調査時に着手し調査終了後まで実施した。

II 天神山遺跡

1. 遺跡の位置と環境

天神山遺跡は、JR鳥取駅から西北西へ4.5kmの鳥取市湖山に所在し、湖山池東岸の標高25m程度の低独立丘陵とその周辺に広がる標高2m前後の平野部に展開する。範囲は、北は旧湖山川、南は主要地方道鳥取・鹿野・倉吉線、東は布勢街道、西は湖山池東岸によって区切られるあたりである。

湖山池は鳥取平野の中央を北流する千代川の堆積作用と湖山砂丘の発達等によって形成された潟湖で、その周辺では原始から多くの遺跡が営まれている。現在知られる最古のものは縄文時代前期末の土器が見つかった桂見遺跡で、その後、天神山遺跡をはじめとしたいいくつかの遺跡が砂丘上に形成され、また、低湿地には低地性遺跡群が形成される。弥生時代に入ても縄文時代晩期からの遺跡が引き続き営まれるが、岩吉遺跡・桂見遺跡・東桂見遺跡等で稻作が導入され、後期になると周辺の低丘陵にはしだいに墳墓が形成されることとなる。古墳時代にも周辺の低丘陵上には多くの占墳が造営される。

歴史時代にはこの地域は因幡国高草郡の一部となり、条里制が敷かれたようであるが、東大寺の高庭庄として開発される。その後東大寺の地位の低下に伴い高庭庄経営も悪化し、国衙領として再編されたものと思われる。14世紀に因幡守護に任じられた山名氏は、15世紀に入って守護所を布施に移して布施天神山城を築き、因幡国支配の本拠地とする。なお16世紀後半にはこの本拠が久松山に移され、周辺地域はしだいに田畠に復すこととなる。

2. 発掘調査の概要[第2図:図版1-1]

今回の調査は宅地開発計画に伴うもので、天神山城の城下町・堀等の遺構の有無、その他の時期の遺構の有無を確認することに主眼をおいて実施した。対象地は標高2m程度の鳥取農業高校実習田・畑で、一辺5m程度のトレンチ7ヶ所と、長さ25m強のトレンチ2ヶ所の計9ヶ所のトレンチを設定した。

調査の結果、土坑あるいは溝状遺構(T r - 1)、溝状遺構(T r - 7)、自然流路・杭列(T r - 8)を検出した。また、遺物は第9トレンチ以外の各トレンチから検出されたが、その多くは小片で耕作土あるいは客土中からの出土である。これらのうち、表掲のものも含めて5点を図化した。

第1トレンチ[第2図:図版1-1]

調査対象地の南西隅に設定した5.0×4.9mのトレンチで、地表面標高は2.0mである。耕作上下に客土がなされ、その下に旧耕作土と思われる灰色シルト層が認められる。標高1.2~1m付近の暗灰色粘土層は密度は低いものの遺物包含層で、僅かに土師器細片が検出されている。標高1m弱から下は砂層となり、断面観察でこの砂層上面から七坑あるいは溝状遺構を検出した。なお、砂層から直径3cm程度の自然木を利用した杭片が検出されている。

第2トレンチ[第2図:図版1-1]

第1トレンチの東50mに設定した5.1×5.0mのトレンチで、地表面標高は2.0mである。耕作上下に客土がなされ、その下に旧耕作土と思われる暗青灰色粘土層が認められる。標高1.2~1.1m以下には泥炭質土が入り混じった砂層が堆積し、標高0.9~0.8m付近に茶褐色泥炭層が認められて以下は砂層となる。このうち、標高1.1~1.2m付近の暗灰色シルト層は密度は低いものの遺物包含層で、僅かながら土



第2図 天神山遺跡 調査トレンチ配置図

器片が検出されている。なお、当該期の遺構は検出されなかった。

第3トレンチ (Tr-3) [第3回調査2号]

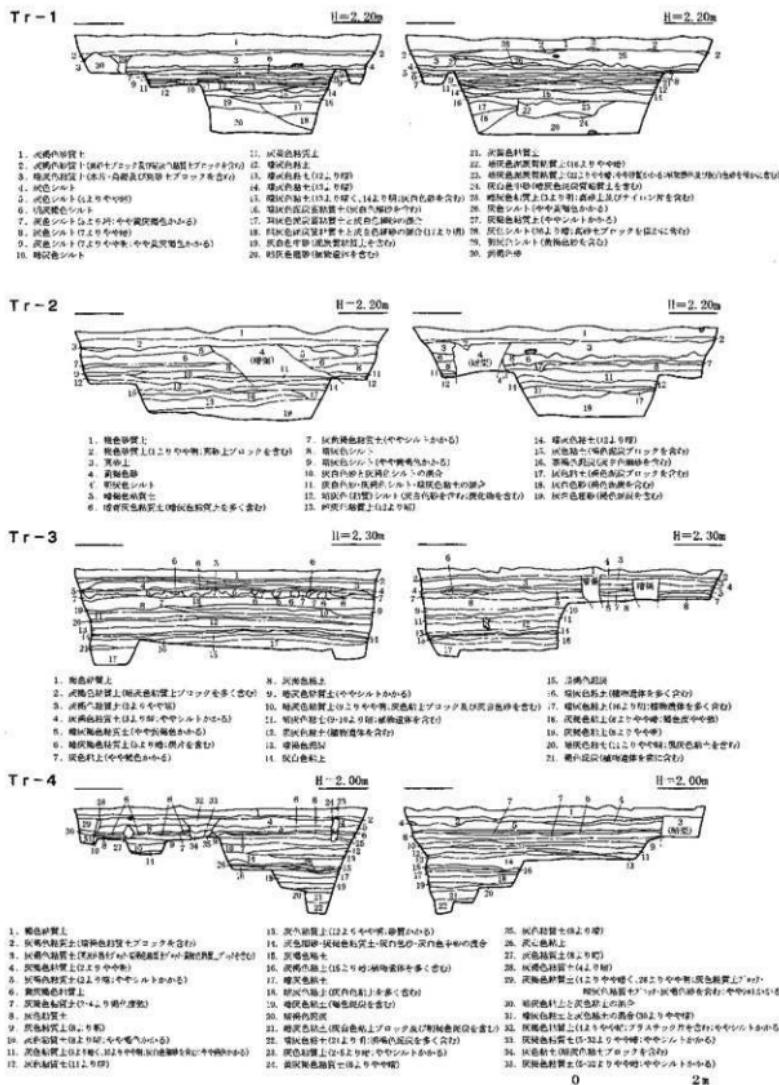
第2トレンチの北東75mに設定した5.0×5.0mのトレンチで、地表面標高は1.6mである。耕作土下の灰色粘土層上面(標高1.2m)付近で層序の乱れが認められ、瓦質土器片や白磁片、土師器片が僅かながら検出されているが、明瞭に遺構と判断されるものは認められなかった。その下は暗灰色系の粘土層(標高1.2~0.55m付近)、(黒)褐色泥炭(標高0.5m付近)、灰(褐)色系の粘土層(標高0.5m付近以下)と続く。なお、当該期の遺構は検出されなかった。

第4トレンチ (Tr-4) [第3回調査2号・四版4号]

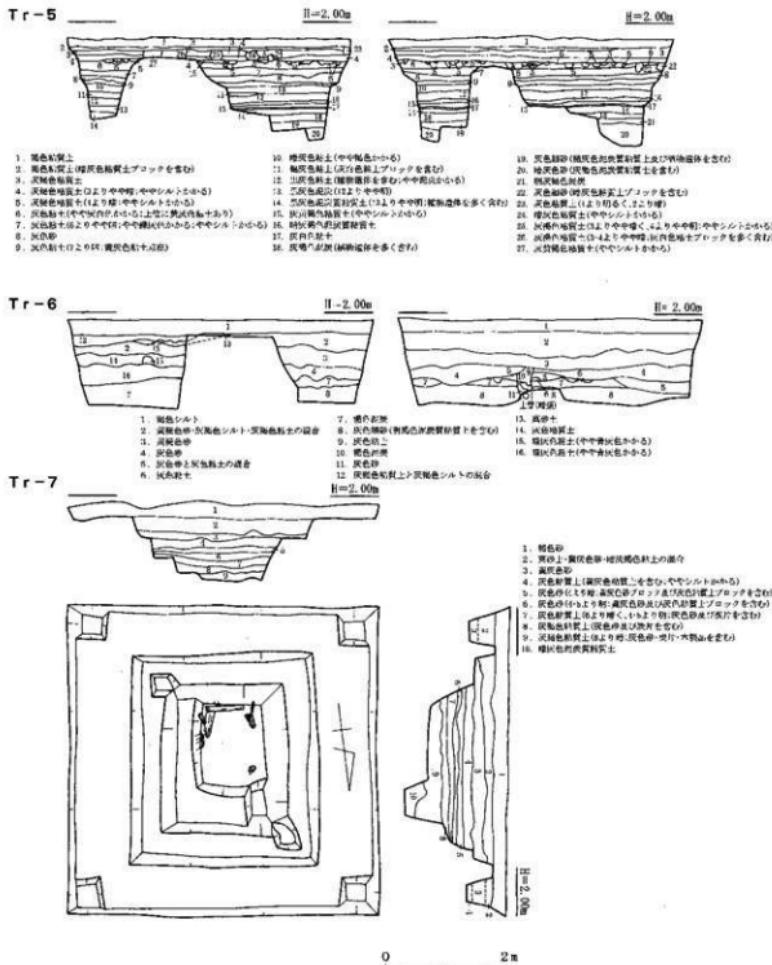
第3トレンチの南東35mに設定した4.94×4.8mのトレンチで、地表面標高は1.7mである。耕作土下の灰色粘土層(標高1.2m)付近が僅かながらの遺物包含層で、瓦質鍋(第3図1)等の小片が検出されている。その下は、標高0.9m付近までが灰色系粘土上の堆積、20cm程度の砂層の堆積があって、それ以下は粘土層・植物遺体や泥炭を含む粘土層(標高0.7~0.4m付近)、泥炭層(標高0.4~0.3m付近)、泥炭を含む粘土層(標高0.3m以下)と続く。なお、当該期の遺構は検出されなかった。

第5トレンチ (Tr-5) [第4回調査1号]

第4トレンチの北45mに設定した4.8×4.65mのトレンチで、地表面標高は1.7m強である。耕作土下の灰色粘土層(標高1.3m)付近が遺物包含層で、瓦質土器片と陶器片の計2点が検出された。その下は標高1.0~1.1m付近に砂層があるものの粘土層が堆積し、標高0.7m以下に泥炭層、0.4m以下に砂層が堆積する。なお、明瞭に遺構と判断されるものは認められなかった。



第3図 天神山遺跡 第1・第2・第3・第4トレンチ断面実測図および第4トレンチ出土遺物実測図



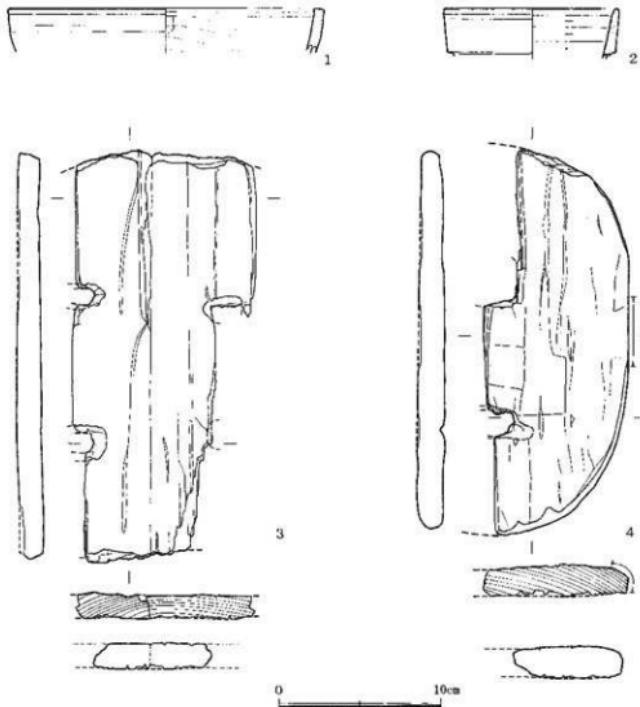
第4図 天神山遺跡 第5・第6・第7トレンチ実測図

第5トレンチ (Tr-5) 5.0×5.0m

第5トレンチの西100mに設定した5.0×5.0mのトレンチで、地表面標高は1.9m強である。耕作土下に客土がなされ、その下の標高0.8~0.9mに泥炭層、そして砂層と続く。遺物は耕作土と客土中から陶磁器片が出上したのみで、遺構も検出されなかった。なお第6トレンチと第2トレンチの中間付近に掘られた穴の排土から炮烙鍋あるいは脚付香炉の可能性が考えられる素焼きの土器(第5図2)を表採した。

第6トレンチ (Tr-6) 5.1×5.06m

第6トレンチの西45mに設定した5.1×5.06mのトレンチで、地表面標高は1.85m程度である。耕作土



第5図 天神山遺跡 出土遺物実測図（2表採；1・3・4は第7トレンチ）

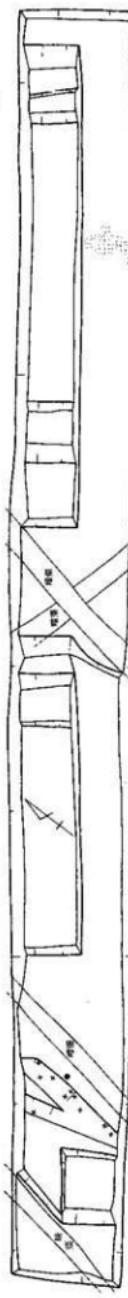
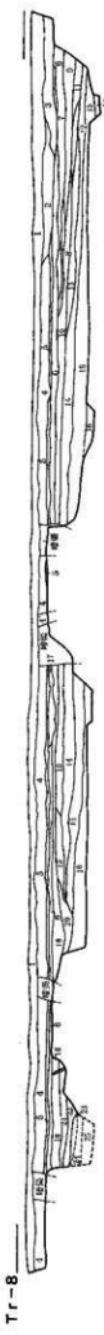
下に客土がなされ、標高0.8~1.3m付近にごく僅かに土器の細片を含む灰色粘質上(砂)層が堆積する。さらにその下には木製品を多く含む灰褐色粘質土層(標高0.3~0.8m付近)が堆積し、あるいは溝状遺構埋土の可能性も考えられる。以下は、泥炭質の粘質土、砂層(標高0.15m以下)へと続く。なお遺物は小片のため瓦質土器口縁部片(第5図1)と使用痕の認められる田下駄(同図3、4)を実測した。

第6トレンチ(Trench 6)【第6トレンチ】

第6トレンチの東25m付近から南西~北東方向に細長く設定した26.0×2.3mのトレンチで、地表面標高は1.6m程度である。標高1.1~1.2m付近にごく僅かに土師器・陶器の小片を含む灰白色粘土層が堆積する。以下には基本的に薄い粘土層を挟みながら泥炭質粘質土層が堆積し、さらにその下が砂層となる。この砂層等の観察から、旧地形では本トレンチの南西側から北東方向へ下がる傾斜があったことが認められる。遺構としては、トレンチ南西部の標高1.1m付近から直径3~4cm程度の自然木を利用した杭10本程度がほぼ南北方向に軸を持つように検出され、また断面観察からあるいは自然流路の可能性もある層序の変化を観察したが、いずれも時期等の詳細は不明である。

第7トレンチ(Trench 7)【第7トレンチ】

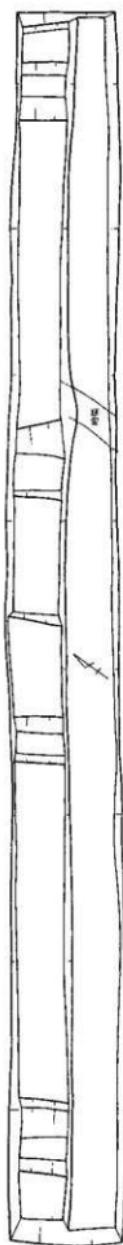
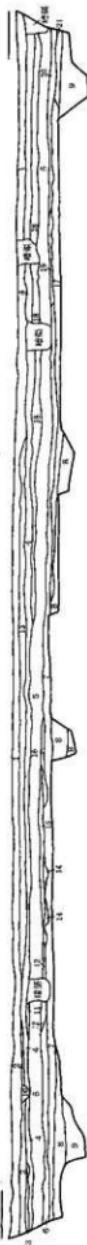
第7トレンチの南35m付近に同トレンチにはほぼ並行の南西~北東方向に細長く設定した25.3×2.3mのトレンチで、地表面標高は1.7m弱である。耕作土下はほぼ順層で、灰色系のシルト・粘質土が続き、標高0.5~0.7m付近以下がマコモ層となる。なお、当該期の遺構、遺物とも検出されなかった。



一見図
◎十箇所断面図
* 机

1. 開口部（中央）開口部（左側）（右側）
2. 壁面上の柱頭
3. 壁面上の柱頭
4. 壁面上の柱頭
5. 壁面上の柱頭
6. 壁面上の柱頭
7. 壁面上の柱頭
8. 壁面上の柱頭
9. 壁面上の柱頭
10. 壁面上の柱頭
11. 壁面上の柱頭
12. 壁面上の柱頭
13. 壁面上の柱頭
14. 壁面上の柱頭
15. 壁面上の柱頭
16. 壁面上の柱頭
17. 壁面上の柱頭
18. 壁面上の柱頭
19. 壁面上の柱頭
20. 壁面上の柱頭
21. 壁面上の柱頭
22. 壁面上の柱頭
23. 壁面上の柱頭
24. 壁面上の柱頭
25. 壁面上の柱頭
26. 壁面上の柱頭
27. 壁面上の柱頭
28. 壁面上の柱頭
29. 壁面上の柱頭
30. 壁面上の柱頭
31. 壁面上の柱頭

Tr-9



1. 地盤表面（開口部）（壁面）（柱頭）
2. 地盤表面（柱頭）
3. 地盤表面（柱頭）
4. 壁面上の柱頭
5. 壁面上の柱頭
6. 壁面上の柱頭
7. 壁面上の柱頭
8. 壁面上の柱頭
9. 壁面上の柱頭
10. 壁面上の柱頭
11. 壁面上の柱頭
12. 壁面上の柱頭
13. 壁面上の柱頭
14. 壁面上の柱頭
15. 壁面上の柱頭
16. 壁面上の柱頭
17. 壁面上の柱頭
18. 壁面上の柱頭
19. 壁面上の柱頭
20. 壁面上の柱頭
21. 壁面上の柱頭
22. 壁面上の柱頭
23. 壁面上の柱頭
24. 壁面上の柱頭
25. 壁面上の柱頭
26. 壁面上の柱頭
27. 壁面上の柱頭
28. 壁面上の柱頭
29. 壁面上の柱頭
30. 壁面上の柱頭
31. 壁面上の柱頭

5m

第6図 天神山遺跡 第8・9トレントンチ実測図

3. 小結

以上の結果から、第1、第7トレンチ周辺については事前の発掘調査が必要と思われる。ほかについては、ごく僅かながら遺物が検出されており、第8トレンチでは詳細不明ながら杭木等が認められていことなどから、工事等に際しては慎重な取り扱いが必要であろう。

III 横枕所在遺跡2・3、横枕古墳群

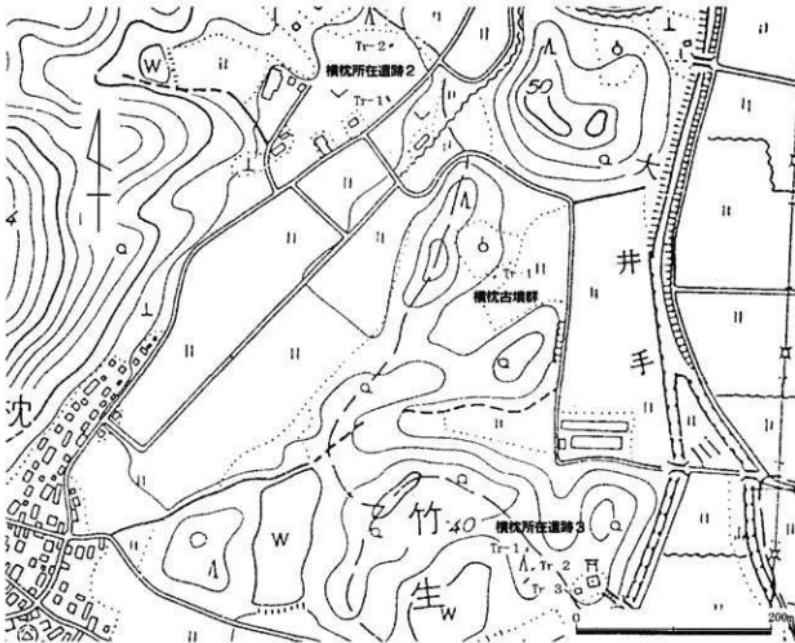
1. 遺跡の位置と環境

横枕所在遺跡2・3、横枕古墳群は、JR鳥取駅から南西へ約5kmの鳥取市横枕、上味野、竹生地内に所在し、横枕集落の北側から東側にかけての丘陵および丘陵裾の微高地に形成されている。遺跡が立地する丘陵付近は標高約20~150mを測り、遺跡の東側1.5kmには千代川が北流し、丘陵からは川の両岸に形成された鳥取平野を望むことができる。周辺には玉津、下味野、北村、服部などの古墳群が丘陵上に立地し、90基あまりの古墳が築造されている。また丘陵裾の微高地にはいくつかの遺物散布地が認められるが、これまでにほとんど調査がなされていないのが現状である。

2. 発掘調査の概要[第7図; 図版5-1, 6-1, 7-3]

今回の調査は道路整備事業に伴って実施したもので、各遺跡とも遺構の有無を確認することに主眼をおいて丘陵裾の平坦部や丘陵上の傾斜変換点にトレンチを設定した。

このうち、横枕集落の北東側に位置する横枕所在遺跡2は、横枕所在遺跡1の北東側に隣接した丘陵裾の微高地に遺物の散布が認められていたもので、トレンチ2ヶ所を設定したが調査の結果、遺構は確認されなかった。また、横枕集落の東側、玉屋神社西裏に位置する丘陵上に平坦地が認められていた



第7図 横枕所在遺跡2・3、横枕古墳群 調査トレンチ配置図

横枕所在遺跡3は、3ヶ所のトレンチを設定して調査した結果、自然地形の落ち込み・土坑・溝状遺構・盛土を検出した。さらに現在の総数60基を数える横枕古墳群では対象地区内に1ヶ所のトレンチを設定して調査を行ったが、古墳その他の遺構は検出されなかった。

1) 横枕所在遺跡2

第1トレンチ【T-1-2】[第8図・図版5-2]

調査対象地である丘陵裾部の畠地に設定した7.0×1.5mのトレンチで、地表面標高は22m強である。耕作土下は(暗)褐色系の土層で小礫が多く含む自然堆積の順層である。第4層以外からは須恵器、土師器、陶器の細片が僅かに検出されているがいずれも二次的な堆積によるものと思われる。なお、遺構は検出されなかった。

第2トレンチ【T-1-2】[第8図・図版5-3]

第1トレンチの北約50m、丘陵裾部の畠地に設定した5.0×2.0mのトレンチで、地表面標高は21.8m程度である。層序は第1トレンチとはほぼ同様で、第2層から弥生上器底部片が検出されているが一次的な堆積によるものと思われる。なお、遺構は検出されなかった。

2) 横枕所在遺跡3

第1トレンチ【T-1-3】[第9図・図版6-1]

調査対象地である丘陵上の鞍部に設定した4.0×1.5mのトレンチで、地表面標高は32.5~32.7m程度である。現状では荒れ地となっているが、かつては畠地として利用されていたよう、表土(耕作土)中から須恵器および陶器片が出土している。遺構は検出されなかったが、トレンチの北側に向って自然地形の傾斜が認められる。

第2トレンチ【T-1-3】[第9図・図版6-3]

第1トレンチの南南東約20mの傾斜の変換部分に設定した4.5×0.75mのトレンチで、地表面標高は34.2~34.9m程度である。現在は植林地として利用されているが、トレンチ北東隅で表上下の地山を掘り込む土坑を検出した。なお遺物は検出されなかった。

第3トレンチ【T-1-3】[第9図・図版6-2]

第2トレンチの南西約10mの傾斜の変換部分に設定した7.0×1.0mのトレンチで、地表面標高は32.4~33.25m程度である。現在は植林地として利用されているが、トレンチ北東側から盛土の可能性が考えられる土層の変化が認められ、南西側では地山カット状の地形が認められた。たまたま遺物は、トレンチ北東側の表土中から須恵器杯身(第9図1)ほかの須恵器片が検出されている。

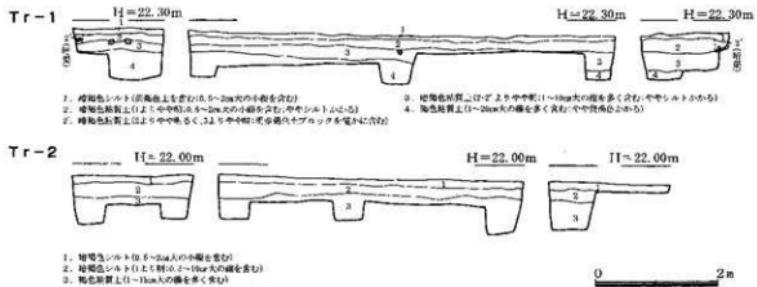
3) 横枕古墳群

第1トレンチ【T-1-1】[第9図・図版8-1]

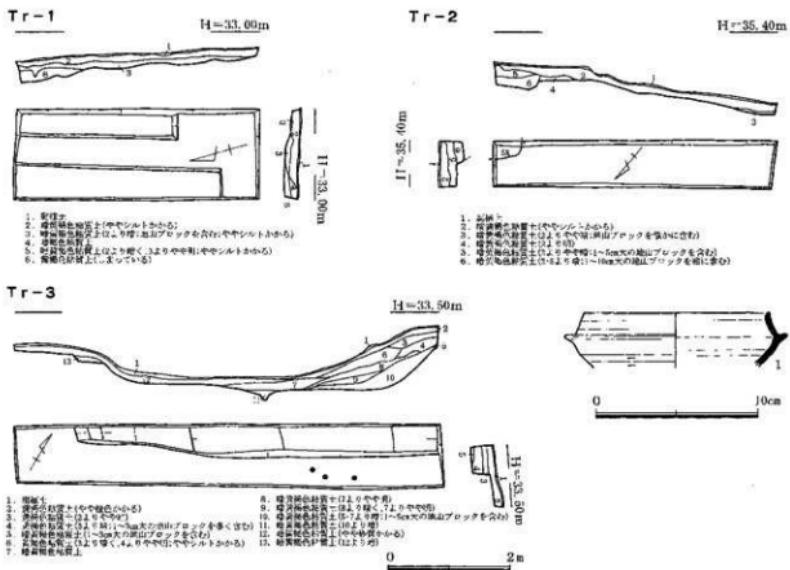
調査対象地である丘陵斜面の平坦地に設定した2.0×2.0mのトレンチで、地表面標高は15.7~15.8m程度である。調査の結果丘陵斜面の傾斜と同様の北西から南東方向へ下る自然地形の傾斜が認められ、かつて畠地として利用した際に丘陵斜面の一部を平坦化したものと推定された。なお遺構、遺物ともに検出されなかった。

3. 小結

調査の結果、横枕所在遺跡2の対象地内には明瞭な遺構は遺存しないものと思われる。但し僅かとはいえ遺物包含層が認められることは事実であり、周辺に遺構が存在する可能性は考慮しておく必要がある。また、横枕所在遺跡3で検出された土坑や盛土状の土層変化、地山のカット部分、古墳時代後期の遺物の出土はいずれも古墳等の存在を示すものと考えられ、調査トレンチの北西側(丘陵尾根の高位側)にも古墳が続くこと見られることから、対象地区は事前の発掘調査が必要と考えられる。なお、横枕古墳群の調査では古墳等の遺構は検出されなかった。



第8図 横枕所在遺跡2 第1・第2トレンチ断面実測図



第9図 横枕所在遺跡 3 第1・第2・第3トレーンチ実測図および第3トレーンチ出土遺物実測図



第10図 横枕古墳群 第1トレンチ実測図

IV 本高段木遺跡

1. 遺跡の位置と環境

本高段木遺跡は東に千代川を望む鳥取市本高地内に所在し、JR鳥取駅の南西約3kmに位置する。この付近には中国山地から鳥取平野へ向けて伸びる丘陵・独立丘陵が形成され、本遺跡はこれらうちの一つの独立丘陵北側裾部の微高地上に立地する。

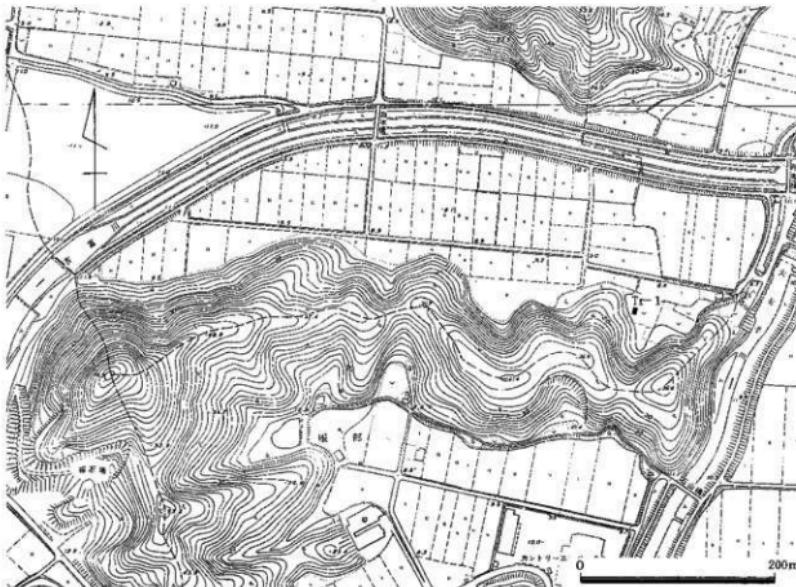
周辺の遺跡としては、千代川水系によって形成された平野部では、服部集落西側の標高7~8m程度の微高地上に服部遺跡が所在し、岡場整備の際に弥生時代後期の土器や大足・円下駄等の木製品が出土している。この服部遺跡の北側にある独立丘陵「釣山」の北側には山ケ鼻遺跡、菖蒲遺跡が位置し、绳文時代後期~中世の遺構や遺物が検出されている。さらにその東には白鳳期創建と推察されている菖蒲庵寺跡がある。また、各丘陵上には横枕古墳群、下味野古墳群、服部古墳群、釣山古墳群などが形成されている。

2. 発掘調査の概要[第11図;図版8-2]

今回の調査は道路整備事業に伴って実施したもので、遺物散布地として知られる本遺跡において遺構の有無を確認することに主眼をおいてトレンチ1ヶ所を設定して調査を行った。調査の結果、溝状遺構、上坑等、ピットおよび遺物を検出した。

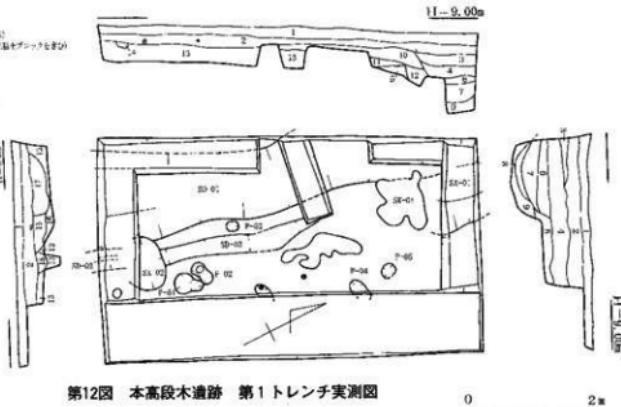
第11図: 第11図(第11図;図版8-2)

調査対象地である丘陵裾部の畑地に設定した6.2×3.6mのトレンチで、昨年度の調査トレンチから約130m東に位置する。地表面標高は8.8m前後である。耕作土下に遺物包含層でもある厚さ15cm前後の灰黄褐色シルト層が堆積し、その下に部分的にはあるが断面観察から2面の遺構面を確認した。遺構は22m²強の狭い調査面積ながら、溝状遺構2条、七坑1基、ピット5基、不明遺構2基等が検出された。ま



第11図 本高段木遺跡 調査トレンチ配置図

- ごとく、薄い「薄食」
 朝食は「朝食」とは言ふが、薄い「薄食」である。
 朝食は朝ごはん、朝食を吃す、朝食の事。薄い朝食。
 食事は「食事」とは言ふが、薄い「食事」である。
 二つとも「薄食」でなく「薄い食事」である。
 薄い朝食は「朝食」の事。
 薄い食事は「食事」の事。
 朝食は「朝食」の事。
 食事は「食事」の事。

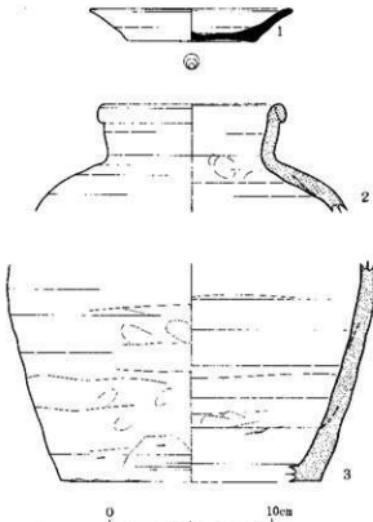


第12図 本高段木遺跡 第1トレンチ実測図

た遺物は、古代から中世・近世にいたる須恵器、土師器、土師質土器、瓦質土器、陶器の小片および五輪塔等が検出され、そのうち底部糸切り調整の須恵器皿(第13図1)、陶器壺(同2、3)を実測した。

3. 小結

調査の結果、トレント設定個所周辺に遺跡が存在することが確認された。しかしながら、昨年度の調査と本年度の調査では調査地の北側に広がる平野部等での範囲は未確定である。今後とも必要に応じて補充調査が必要であろう。



第13図 本高段木遺跡 第1トレンチ出土遺物実測図

V 長谷所在遺跡 1

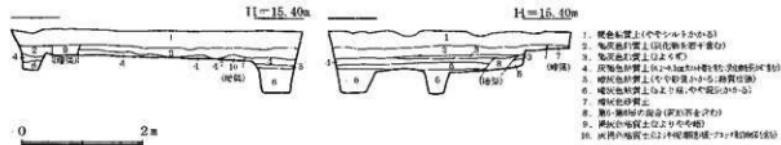
1. 遺跡の位置と環境

長谷所在遺跡1は鳥取市長谷地内に所在し、JR鳥取駅の南南西約6.5kmに位置する。この付近は中国山地から鳥取平野へ向けて伸びる丘陵縦谷とその東を北流する千代川の氾濫源の境界にあたり、現在は水田・畑地として利用されている。標高は15m程度である。

周辺ではこれまで発掘調査が行われたことがなく、いくつかの遺物散布地が知られるほか、丘陵上に



第14図 長谷所在遺跡1 調査トレンチ配置図



第15図 長谷所在遺跡1 第1トレンチ断面実測図

玉津古墳群や横枕古墳群、鶴尾城跡等が知られるのみである。なお調査地の北西約350mには式内社の倭文神社が鎮座する。

2. 発掘調査の概要[第14図;図版9-2]

今回の調査は道路整備事業に伴って実施したもので、遺物散布地として知られる本遺跡において遺構の有無を確認することに主眼をおいてトレンチ1ヶ所を設定して調査を行った。調査の結果遺構は検出されなかった。

第1トレンチ実測図[図版9-1]

調査対象地である主要地方道鳥取・河原線沿いの畠地に設定した4.6×4.0mのトレンチで、地表面標高は15.2m程度を測る。耕作土下に厚さ15cm程度の客土とみられる褐灰色粘質土層が認められる。明瞭な遺構は検出されておらず、遺物も標高14.6~14.7m程度の灰褐色粘質土層から土器細片が1片と標高約14.6m以下の暗灰色粘質土層中から厚さ2.5mm程度の板状木製品が検出されたに留まった。いずれも二次堆積遺物と考えられる。

3. 小結

今回の調査の結果、当該の遺構・遺物とも確認できず、調査トレンチ周辺には遺跡は存在しないものと考えられる。

VI 倭文所在遺跡1・2

1. 遺跡の位置と環境

倭文所在遺跡1・2は、JR鳥取駅の南南西約6～6.3kmの鳥取市倭文地内に所在し、倭文集落の西側丘陵および丘陵裾・平野部に位置する。両遺跡の500m程度東には千代川が北流し、その両岸に鳥取平野が形成されている。

周辺遺跡についてはVすでに述べたとおりで、古墳群や城跡、遺物散布地以外にはほとんど知られていない現状である。

2. 発掘調査の概要[第16図:図版10-2,11-3]

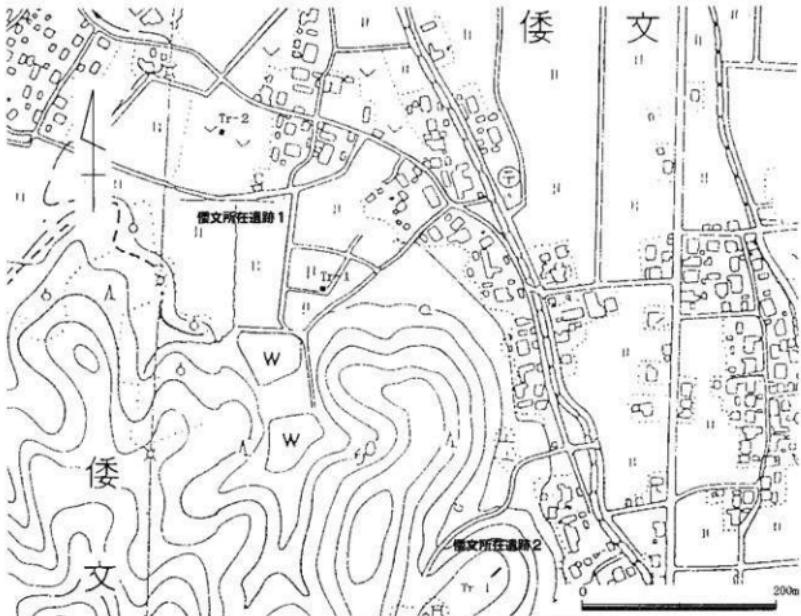
今回の調査は道路整備事業に伴って実施したもので、両遺跡とも遺構の有無を確認することに主眼をおいて丘陵裾の平坦部等や丘陵上の傾斜変換点にトレンチを設定した。

このうち倭文所在遺跡1では、丘陵裾および平野部に計2ヶ所のトレンチを設定して調査を実施し、調査の結果、自然地形の傾斜と土坑状遺構およびピットを検出した。また、丘陵上の倭文神社のすぐ手前にあたる平坦地(倭文所在遺跡2)ではトレンチ1ヶ所を設定して調査を行ったが、自然地形の傾斜以外には遺構は検出されなかった。

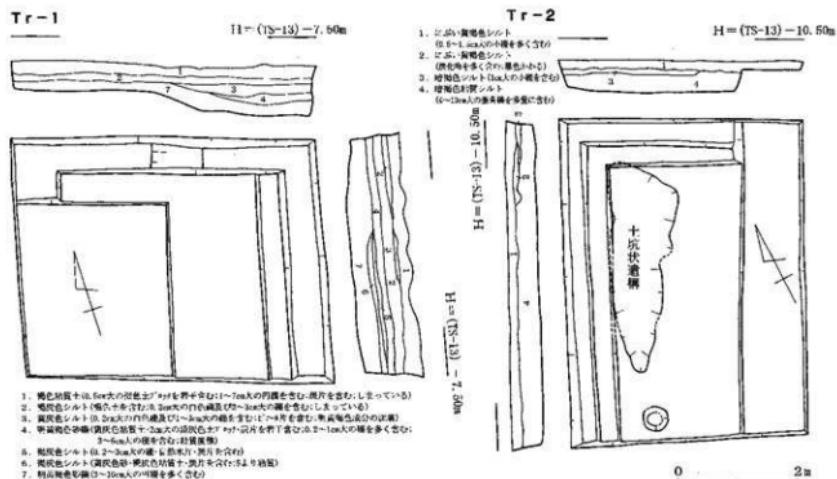
1) 倭文所在遺跡1

第1トレンチ[Tr-1] [第17,18図:図版10-3,11-2]

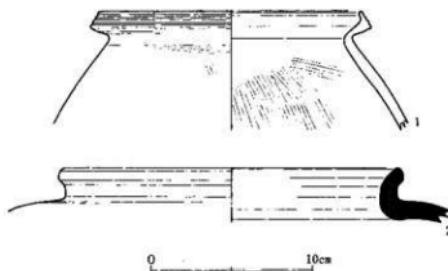
調査対象地である丘陵裾部の畠地に設定した5.0×4.0mのトレンチで、地表面標高は24m程度である。耕作土下の褐色および黄褐色シルト層中には須恵器や陶器片が含まれるが、同時にビニール片も含まれており、客土と考えられる。また、その下の標高23.7m以下の明黄褐色砂礫層は西から東方向へ自然地形と思われる傾斜を持ち弥生土器片を包含しているが、その他には明瞭な遺構は検出されなかった。



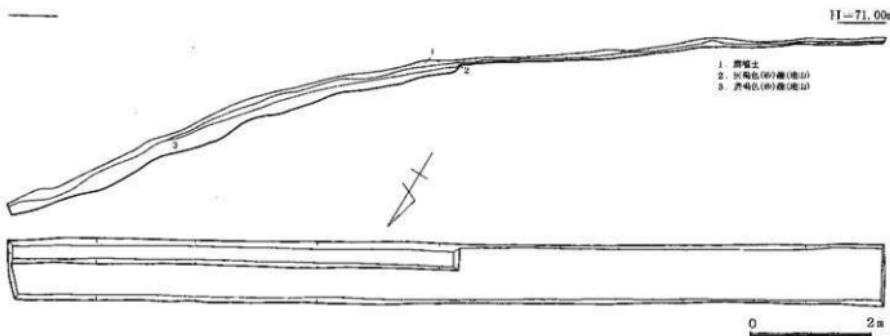
第16図 倭文所在遺跡1・2 調査トレンチ配置図



第17図 倭文所在遺跡1 第1・第2トレーニチ実測図



第18図 倭文所在遺跡1(上)、倭文所在遺跡2(下)出土遺物実測図



第19図 倭文所在遺跡2 第1トレーニチ実測図

なお出土遺物のうち、弥生土器壺(第18図1)を実測した。

第2トレンチ(第18-19) [第18-19図; 図版12-1, 12-2]

第1トレンチの北西約190mの平野部畑地に設定した5.4×4.0mのトレンチで、地表面標高は21.3m程度である。耕作土下の暗褐色粘質シルト層上面(標高21.1m程度)から上坑状遺構1基とピット1基を検出した。また遺物は、耕作土中の陶磁器類のほかに上坑状遺構埋土中から糸切りの土師皿や杯の小片が検出されている。

2) 倭文所在遺跡2

第2トレンチ(第18-19) [第18-19図; 図版12-1, 12-2]

調査対象地である丘陵上先端部の山林に設定した14.4×1.0mのトレンチで、最高位の地表面標高は70.75m程度である。調査の結果、表上である腐植土の下は直ちに地山の岩盤で、この地山を形成する遺構は検出されなかった。遺物は、表土中から須恵器片と表土直下から土師器片が検出され、そのうちの須恵器II縁部片(第18図2)を実測した。

3. 小結

調査の結果、倭文所在遺跡1の第2トレンチ周辺に遺跡が存在することが確認されたが、遺跡の範囲をつかむまではいたらなかった。今後とも必要に応じて補充調査が必要であろう。また倭文所在遺跡2では、遺物はごく僅かに検出されたものの明瞭な遺構は認められずこの付近に遺跡は存在しないものと考えられる。但し、この地は式内社倭文神社前であり、周辺の丘陵上に城跡も遺存することから今後とも注意を払っていく必要はある。

VII 下味野所在遺跡1、下味野古墳群

1. 遺跡の位置と環境

下味野所在遺跡1および下味野古墳群はJR鳥取駅から南西へ4km前後の鳥取市下味野地内に所在し、下味野集落の西から北西にかけての丘陵上に形成されている。遺跡が立地する丘陵は標高約50~160mを測り、遺跡の東側1.5kmには千代川が北流し、丘陵からは川の両岸に形成された鳥取平野を望むことができる。周辺には玉津、横枕、北村、服部などの古墳群が丘陵上に立地し、多くの古墳が築造されている。また前述のとおり丘陵の微高地にはいくつかの遺物散布地が認められるがこれまでにほとんど調査がなされていないのが現状である。

2. 発掘調査の概要[第20図; 図版12-3]

今回の調査は道路整備事業に伴って実施したもので、両遺跡とも遺構の有無を確認することに主眼をおいて丘陵上の平坦部や傾斜変換点にトレンチを設定した。

このうち、下味野所在遺跡1は、丘陵上の平坦地形として調査対象とされたもので、トレンチ1ヶ所を設定して調査を実施した結果、溝状遺構が検出された。また、下味野所在遺跡1の北50mに位置する下味野古墳群では計3ヶ所のトレンチを設定して調査を実施したが、いずれのトレンチからも溝状遺構が検出された。

1) 下味野所在遺跡1

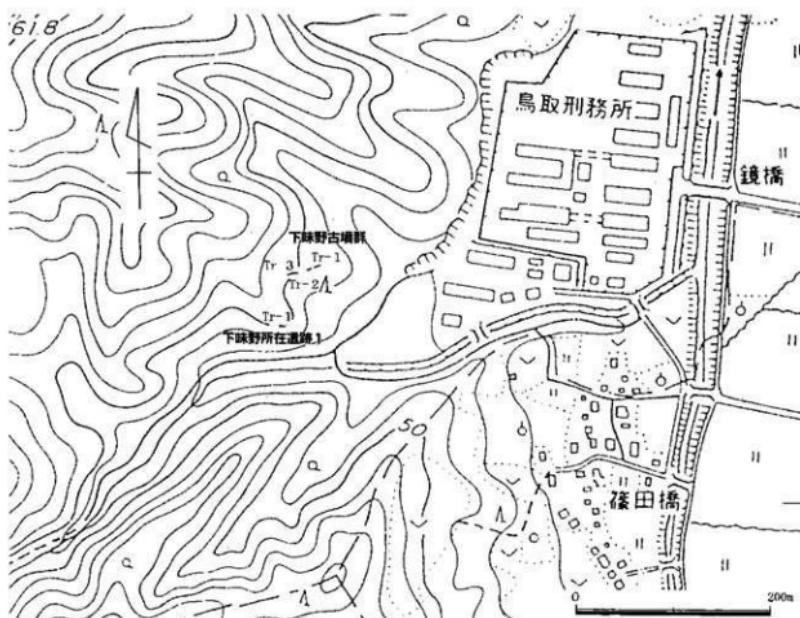
第1トレンチ(第18-1) [第18-18図; 図版13-1]

調査対象地である丘陵上の平坦地にかけての傾斜変換点に設定した6.1×0.7mのトレンチで、地表面標高は48.7~49.6m程度である。調査の結果、傾斜変換部分の表上下から地山をカットした溝状遺構を検出した。遺物は、地山直上から土師器細片が僅かに検出されている。

2) 下味野古墳群

第1トレンチ(第18-1) [第22図; 図版13-1]

下味野所在遺跡1(第1トレンチ)の北東約65m付近で、調査対象地である丘陵上の傾斜変換点に設定した6.4×0.7mのトレンチである。地表面標高は46.1~46.9m程度を測る。調査の結果、傾斜変換部分の



第20図 下味野所在遺跡1、下味野古墳群 調査トレンチ配置図

表土下から地山をカットした溝状遺構を検出した。遺物は、表土中から上師器小片が検出されている。

第2トレンチ(Tr-2)【第20図調査1】

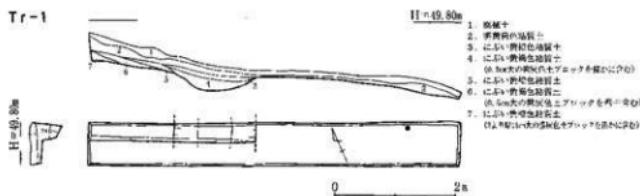
第1トレンチの5mほど南西の傾斜変換点に設定した4.5×0.7mのトレンチで、地表面標高は47.05～47.75m程度である。調査の結果、第1トレンチと同様に傾斜変換部分の表上下から地山をカットした溝状遺構を検出した。遺物は、表土中から土師器片が1点検出されている。

第3トレンチ(Tr-3)【第20図調査3】

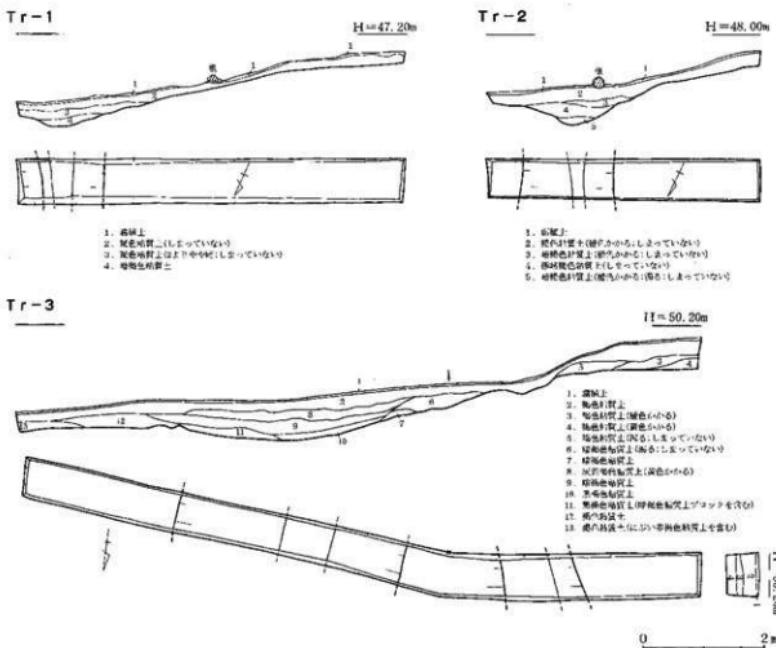
第2トレンチの10mほど南西の傾斜変換点に設定した11.25×0.7mのトレンチで、地形に合わせて途中でやや角度を振って溝査を行った。地表面標高は48.8～50m程度である。調査の結果、傾斜変換部分の表土下で地山をカットした溝状遺構と地山カット部分を検出した。遺物は、検出されなかった。

3. 小結

調査の結果、下味野所在遺跡1・下味野古墳群とともにすべてのトレンチから溝状遺構等を検出した。いずれも古墳に伴う遺構と考えられ、下味野所在遺跡1の第1トレンチではトレンチの北西側(尾根の高位側)に古墳が存在するものと考えられる。また下味野古墳群では、第1トレンチの北東側(尾根の低位側)、第1～第2トレンチの間、第2～第3トレンチの間、第3トレンチの南西側(尾根の高位側)に古墳が存在するものと考えられ、いずれも事前の発掘調査が必要である。



第21図 下味野所在遺跡1 第1トレンチ実測図



第22図 下味野古墳群 第1・第2・第3トレンチ実測図

平成12(2000)年度 市内遺跡 試掘調査トレンチ一覧表

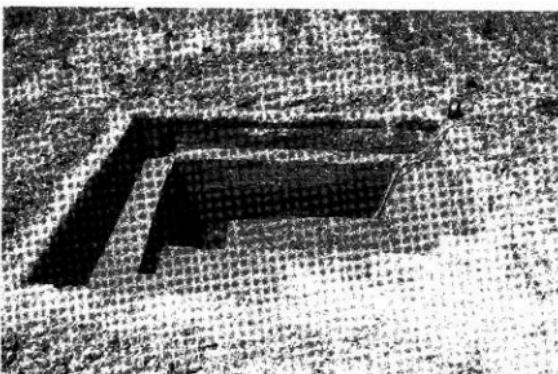
調査遺跡名	トレンチ	面 積 (m ²)	遺 構	遺 物	備 考
天神山遺跡	T r - 1	5.0×4.9 =24.5	土坑又は溝状構	陶器、土師器細片、木製品	
※	T r - 2	5.1×5.0 =25.5		陶磁器、七器	
※	T r - 3	5.0×5.0 =25.0		陶磁器、瓦質土器、土師器、須恵器、土雞	
※	T r - 4	4.94×4.8 =23.712		土師器、須恵器、瓦質土器	
※	T r - 5	4.8×4.65 =22.32		陶磁器、土師器、瓦質土器	
※	T r - 6	5.0×5.0 =25.0		陶磁器	遺物は、耕作土及び客土巾から出土
※	T r - 7	5.1×5.06 =25.806	溝状造構か?	陶磁器、土師器、須恵器、瓦質土器、木製品	
※	T r - 8	26.0×2.3 =59.8	杭列?自然流路?	土師器、陶器、須恵器、木製品	
※	T r - 9	25.3×2.3 =58.19	—	—	
横枕所在遺跡 2	T r - 1	7.0×1.5 =10.5	—	土師器細片、須恵器細片、陶器	
※	T r - 2	5.0×2.0 =10.0	—	弥生土器	
横枕所在遺跡 3	T r - 1	4.0×1.5 =6.0	自然地形の傾斜	須恵器、陶器	
※	T r - 2	4.5×0.75 =3.375	土坑	—	
※	T r - 3	7.0×1.0 =7.0	盛土、地山カット?	須恵器	須恵器片は主に表土巾から出土
横枕古墳群	T r - 1	2.0×2.0 =4.0	自然地形の傾斜	—	
本高松木遺跡	T r - 1	6.2×3.6 =22.32	土坑、ピット、溝状造構、不明遺構	陶器、土作質土器、須恵器片、器底器、瓦質土器片、玉飾等	部分的に二面の遺構面あり。検出遺物のうち、ピットは据え柱遺物になる可能性あり
長谷所在遺跡 1	T r - 1	4.6×4.0 =18.4	—	陶磁器片、土器細片、木製品	
倭文所在遺跡 1	T r - 1	5.0×4.0 =20.0	自然地形の傾斜	陶器、須恵器、土師器、弥生土器片	弥生土器以外は客土中の遺物
※	T r - 2	5.4×4.0 =21.6	ピット、土坑状遺構	陶磁器、土師質土器	
倭文所在遺跡 2	T r - 1	14.4×1.0 =14.4	—	須恵質土器、土師器	倭文神社手前の山林
下味野所在遺跡 1(板橋)	T r - 1	6.1×0.7 =4.27	溝状造構	土師器細片	
下味野古墳群	T r - 1	6.4×0.7 =4.48	溝状造構	土師器細片	
※	T r - 2	4.5×0.7 =3.15	溝状造構	土師器	
※	T r - 3	11.25×0.7 =7.875	溝状造構 地山カット	—	
調査面積総合計		4 4 7. 0 m ²		※総面積は、各遺跡ごとの合計の小数点第2位以下を切り捨てたものの合計。	

写 真 図 版

図版1



1. 天神山遺跡
調査地近景
(南東から)

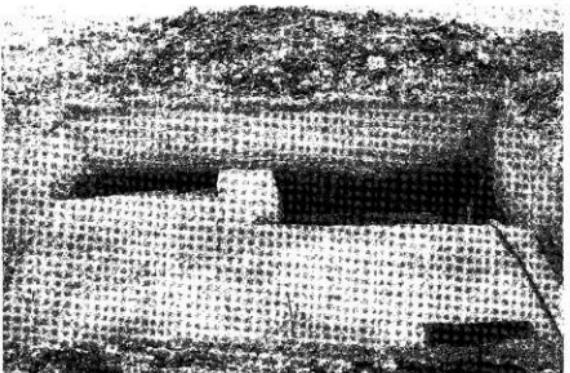


2. 天神山遺跡
第1トレンチ
(南から)

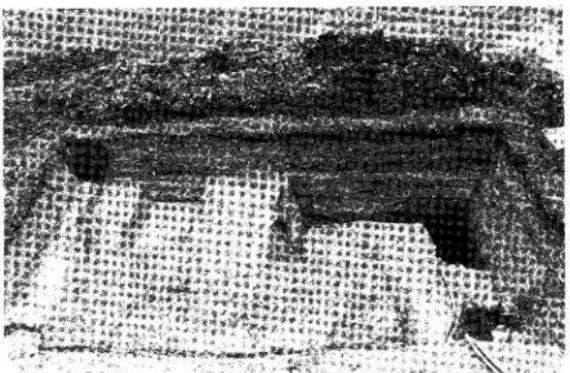


3. 天神山遺跡
第2トレンチ
(北西から)

図版 2



1. 天神山遺跡
第3トレンチ断面(西から)

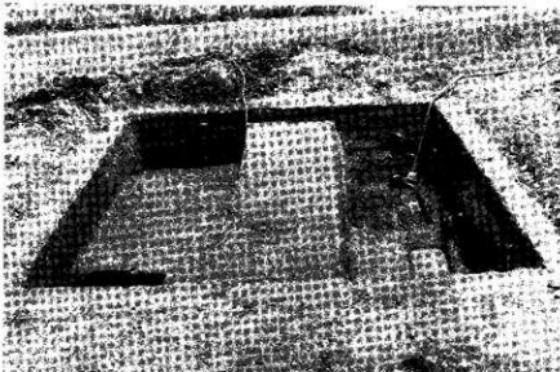


2. 天神山遺跡
第4トレンチ断面(東から)

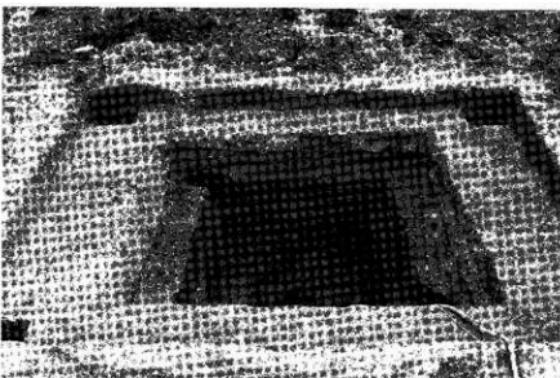


3. 天神山遺跡
第5トレンチ断面(北から)

図版 3



1. 天神山遺跡
第6トレンチ
(西から)



2. 天神山遺跡
第7トレンチ断面(北から)

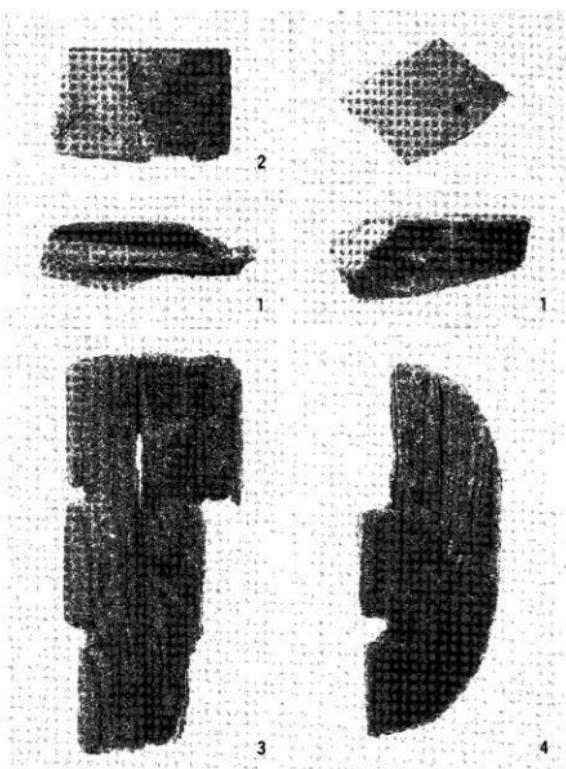


3. 天神山遺跡
第8トレンチ
(北東から)

図版4



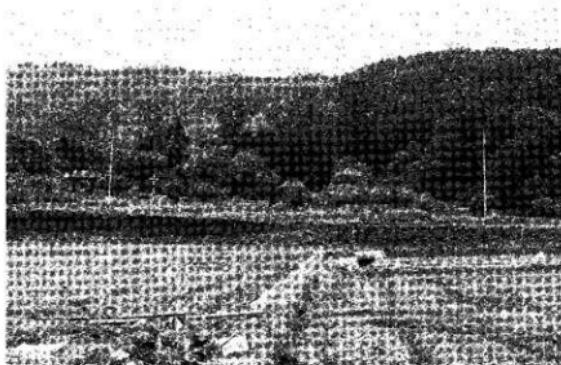
1. 天神山遺跡
第9トレンチ断面
(東北東から)



2. 天神山遺跡
調査区内出土遺物

表様 炮塔or香炉?	T r - 3 輸入白磁?
T r - 4 瓦質鍋	T r - 7 瓦質(口縁部)
T r - 7 田下駄	T r - 7 田下駄

図版 5



1. 横枕所在遺跡 2
調査地遠景 (南東から)



2. 横枕所在遺跡 2
第1トレンチ断面(南から)

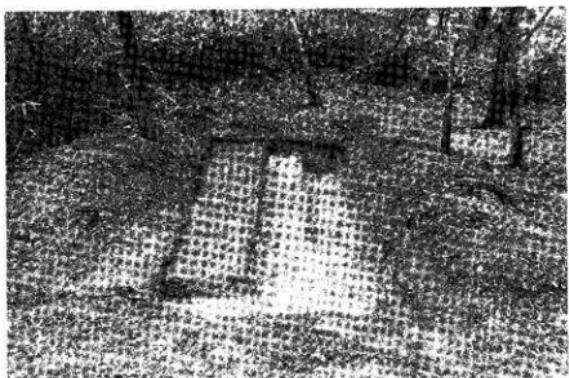


3. 横枕所在遺跡 2
第2トレンチ (北東から)

図版 6



1. 横枕所在遺跡 3
調査地遠景
(南から)

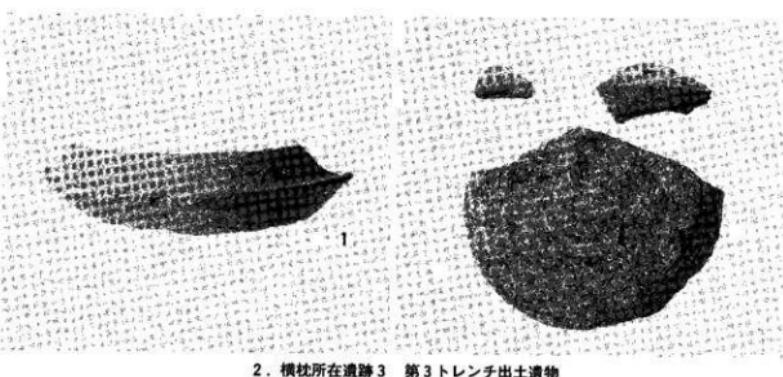


2. 横枕所在遺跡 3
第1トレンチ
(南から)

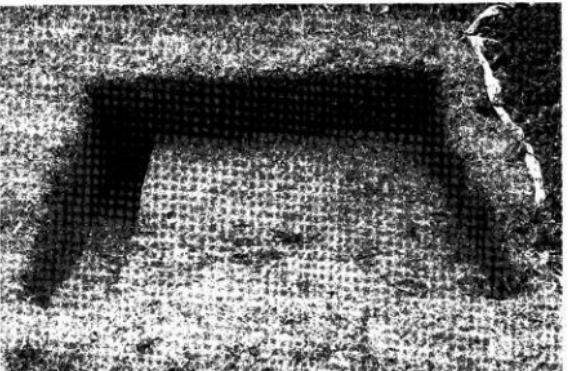


3. 横枕所在遺跡 3
第2トレンチ断面
(西南西から)

図版 7



図版 8



1. 横枕古墳群
第1トレンチ (北西から)

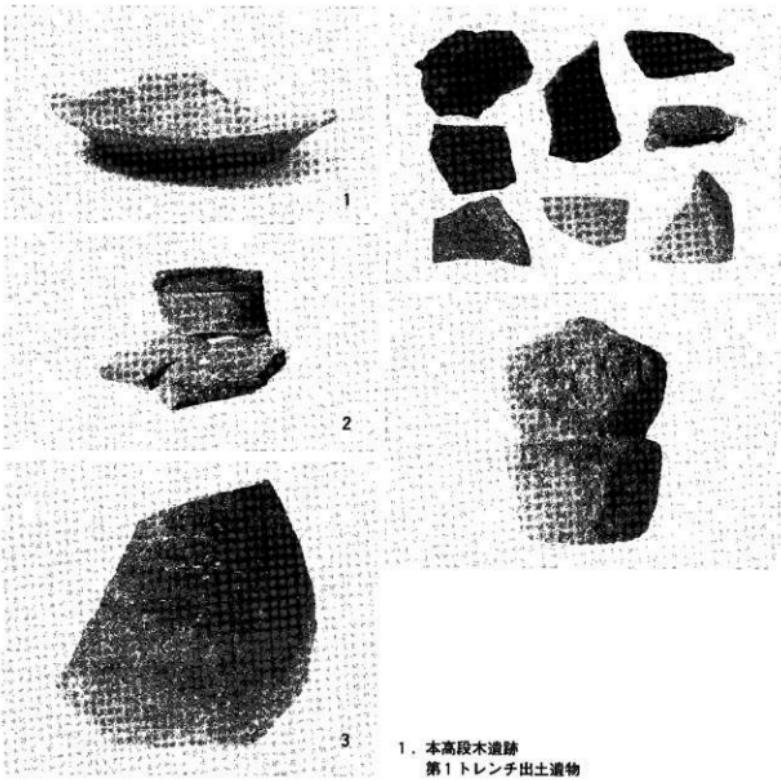


2. 本高段木遺跡
調査地遠景
(北から)



3. 本高段木遺跡
第1トレンチ (北東から)

図版9

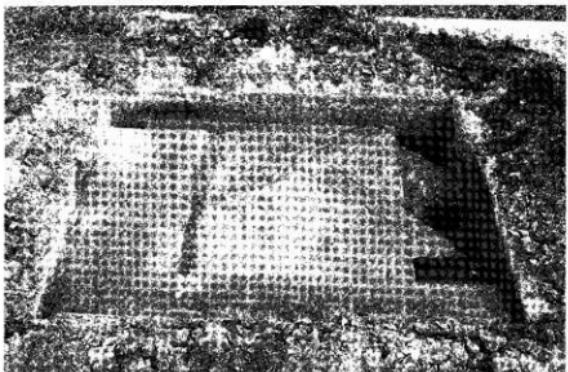


1. 本高段木遺跡
第1トレンチ出土遺物



2. 長谷所在遺跡1
調査地遠景 (東から)

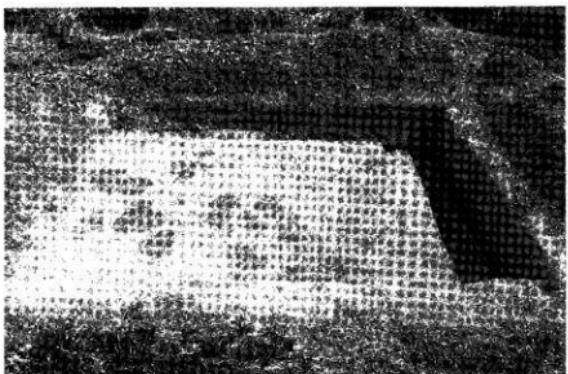
図版10



1. 長谷所在遺跡1
第1トレンチ (西から)

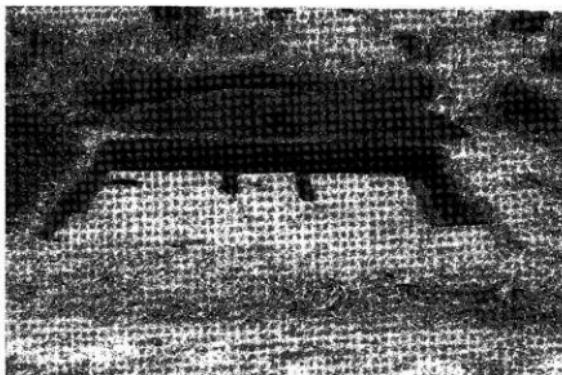


2. 倭文所在遺跡1
調査地遠景 (北から)

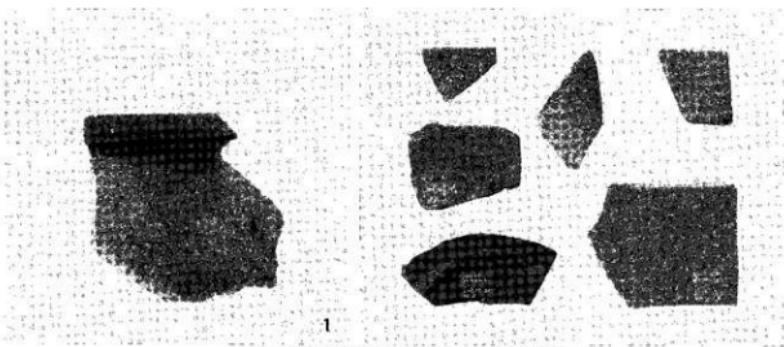


3. 倭文所在遺跡1
第1トレンチ (北西から)

図版11



1. 倭文所在遺跡1
第2トレンチ (南西から)



2. 倭文所在遺跡1 第1トレンチ出土遺物



3. 倭文所在遺跡2
調査地遠景 (南東から)

図版12



1. 倭文所在遺跡2 第1トレンチ (西南西から)



2. 倭文所在遺跡2 第1トレンチ出土遺物



3. 下味野所在遺跡1・下味野
古墳群調査地遠景(東から)



4. 下味野所在遺跡1
第1トレンチ (南東から)

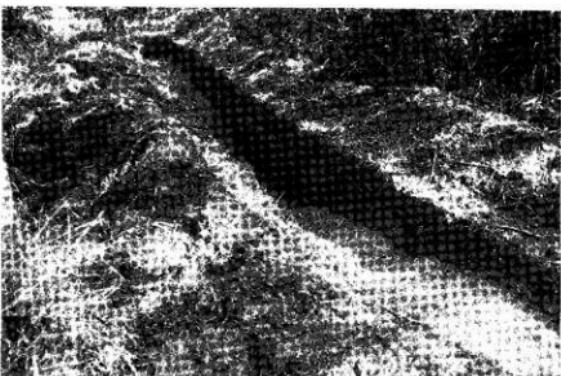
図版13



1. 下味野古墳群
第1トレンチ断面
(北西から)



2. 下味野古墳群
第2トレンチ断面
(北から)



3. 下味野古墳群
第3トレンチ断面
(北西から)

報告書抄録

ふりがな	ハセ12(2000)など	とどきしないときは(つらさがいよほにじ)					
書名	平成12(2000)年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書						
副書名	天神山遺跡、横枕所在道路2・3、横枕古墳群、本高段木遺跡、長谷所在遺跡1、倭文所在遺跡1・2、下味野所在遺跡1、下味野古墳群						
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	山田真宏 平川誠						
編集機関	鳥取市教育委員会						
所在地	〒680-0047 鳥取県鳥取市上魚町39	T E L (0857) 22-8111㈹					
発行年月日	西暦 2001年 3月23日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
天神山遺跡	鳥取市湖山	31201		35° 30' 21"	134° 10' 54"	20000605 ~	289.8 宅地開発
横枕所在遺跡2	鳥取市横枕	31201		35° 27' 13"	134° 11' 47"	20000522 ~	20.5 道路整備
横枕所在遺跡3	鳥取市上味野・竹生	31201		35° 26' 57"	134° 11' 53"	20000807 ~	16.3 道路整備
横枕古墳群	鳥取市横枕・上味野・竹生	31201		35° 27' 07"	134° 11' 52"	20000808 ~	4.0 道路整備
本高段木遺跡	鳥取市本高	31201		35° 28' 31"	134° 12' 11"	20000807 ~	22.3 道路整備
長谷所在遺跡1	鳥取市長谷	31201		35° 26' 06"	134° 12' 12"	20000821 ~	18.4 道路整備
倭文所在遺跡1	鳥取市倭文	31201		35° 26' 25"	134° 12' 08"	20000821 ~	41.6 道路整備
倭文所在遺跡2	鳥取市倭文	31201		35° 27' 16"	134° 12' 15"	20000822 ~	14.4 道路整備
下味野所在遺跡1	鳥取市下味野	31201		35° 27' 39"	134° 11' 42"	20000927 ~	4.2 道路整備
下味野古墳群	鳥取市下味野	31201		35° 27' 40"	134° 11' 43"	20000927 ~	15.5 道路整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
天神山遺跡	散布地	近世	溝状遺構	瓦質土器、田下駄	試掘調査として実施		
横枕所在遺跡2	散布地	?	-	弥生土器、土師器、須恵器	試掘調査として実施		
横枕所在遺跡3	古墳	古墳	上坑、盛上、地山カット	須恵器	試掘調査として実施		
横枕古墳群	平坦地?	?	-	-	試掘調査として実施		
本高段木遺跡	散布地	古代~近世	土坑、溝状遺構、ビット	陶器、瓦質土器、土師質土器、土師器、須恵器、五輪塔	試掘調査として実施		
長谷所在遺跡1	散布地?	?	-	-	試掘調査として実施		
倭文所在遺跡1	散布地	近世・近代	七坑状遺構、ビット	弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器	試掘調査として実施		
倭文所在遺跡2	平坦地?	?	-	須恵器、土師器	試掘調査として実施		
下味野所在遺跡1	平坦地	古墳	溝状遺構	土師器	試掘調査として実施		
下味野古墳群	古墳	古墳	溝状遺構、地山カット	土師器	試掘調査として実施		

平成12(2000)年度
鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

平成13年3月 印刷・発行

編集・発行 鳥取市教育委員会
印刷所 株式会社 矢谷印刷所
